

資本論そのものを読むために
○新日本新書版<13巻本>
○新日本出版社上製版 <全5巻+総索引本>
○東京学習協 宮川父子注釈、学習版 注釈・索引・一部原語つき

参考文献
○宮川彰さんの解説著書、ほっとブックス新栄で検索
○宮川彰さんのDVD講座、ほっとブックス新栄で検索
○新日本出版社発行、月刊雑誌『経済』毎年5月号

資料 A~B 友寄さん『月刊学習』「現代に生きる『資本論』」
C 不破哲三さん
D 原資料

はじめに 科学の成立と上部構造 4分

第1章 『資本論』が想定する共産制社会 16分

1 実際に起きたリアルな歴史

原始共産制社会 → 奴隸制社会 → 封建制社会 → 資本制社会 → 共産制社会

原始共産制社会 → 階級社会 → 共産制社会

これからの歴史(予測)(可能性)

① 資本制社会 ⇒ 過渡期 ⇒ 共産制社会 ② ③ ④

2 労働者とは たんに労働する人、働く人ではない

自分で生産手段を持たず、資本家に雇われて労働力と賃銀を交換する人

その賃銀で消費手段を買い入れて生きていくのが労働者

主婦は「家事労働者」ではない 消費者です

3 生産手段の社会化とは 生産手段は社会化され、社会のコントロール下におかれる 消費手段は個人に平等に分配され、個人の私有になる

4 「資本制社会」に存在するもの 市場・貨幣・資本・労働者

自由平等・餓死する自由・法律の支配・裁判制度

5 過渡期とは何か 資本制から共産制への過渡期

国家は過渡期には存続する

共産制社会では階級・国家・軍隊・警察・強制・暴力・差別は無くなる

市場・貨幣がなくなるかどうかは論争問題、各自で判断を

6 コンピネーションとアソシエーション

共産制社会への道は 資本主義にある程度自由で民主的な社会から出発する

そこからしか出発できない

めざすのは 自由な個人による連合体

第2章 ソ連は過渡期社会だったか 10分

1 ロシア帝国、半封建・半資本主義の遅れた社会が出発点

2 ソ連はどんな社会だったか 法による支配ではない直接暴力による支配 逮捕・追放・銃殺

3 「市場経済」「商売」導入ニレーニンの「ネップ」からの転換 1927年

4 ソ連であったもの・なかったもの ソ連には労働車はいたか?

5 スターリン弾圧・独裁の進行 1930年代～1953年

6 軍事的警察的国家による国家資本主義

< 資料 ① > 不破哲三

「『資本論』でマルクスがおこなった展開は、社会主義・共産主義運動の目標の定式化に、転換点ともいべき大きな変化を引き起きました。

1つは、マッツィーニやデューリングとの論争で、エンゲルスが明確に示したように、生活手段、消費手段の分野での個人的所有あるいは個人財産の問題について、廃止どころか、それをより完全に実現し保障することが、社会主義・共産主義運動の目標だという見地が、きっぱりと定式化されるようになったことです。

この点は、すでに説明すみですので、これ以上は必要ないでしょう。

もう1つの重大な問題は、社会主義・共産主義の目標として、「私的所有の廃止」ではなく、「生産手段の社会化」という定式化がうちだされるようになったことです。

それまでは、マルクス、エンゲルスの文章でも、「生産手段の社会化」というスローガンが提起されたことは、1度もありませんでした。」

(不破哲三『『資本論』全三部を読む 第三冊』、講義第9回、p 271)

< 資料 ② > マルクス「『経済学批判』への序言」(1859年)

「私にとって明らかになり、そしてひとたび自分のものになってから私の研究にとって導きの糸として役立った一般的結論は、簡単に以下のように次のように定式化することができる。

[A①] 人間は、彼の生活の社会的な生産において、一定の、必然的な、彼の意思から独立した諸関係に入りこむ、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係に入りこむ。

[A②] これらの生産諸関係の総体は社会の経済的構造を形成する。これが現実の土台であり、その上に1つの法的なる政治的な上部構造がそびえ立ち、その土台に社会的諸意識形態が対応する。

[A③] 物質的生活の生産様式が、社会的(social)、政治的、および精神的生活過程全般を制約する。

[A④] 人間の意識がその存在を規定するのではなく、逆に人間の社会的存在がその意識を規定する。

[B①] 社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それまでそれらがその内部で運動してきた既存の生産諸関係とそあるいはその法律的表現にすぎない所有諸関係と、矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展の諸形態からその桎梏に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎が変化するにつれて、巨大な上部構造の全体が、徐々にせよ急激にせよ、くつがえる。

[B②] このような諸変革を考察するにあたっては、経済的な生産諸条件に起きた自然科学的な正確さで確認できる物質的な変革と、人間がこの衝突を意識するようになりこれとたかって決着をつける場となる、法律、政治、宗教、または哲学の諸形態、簡単に言えばイデオロギー諸形態とを、つねに区別しなければならない。

[B③] ある個人をなんであるかを判断する場合、その個人が自分をうねぼれ描く評価には頼れないのと同様に、このような変革の時期を、その時期の意識をもとに判断することはできないのであって、むしろ、この意識を、物質的生活の諸矛盾から、すなわち社会的生産諸力と生産諸関係のあいだに存在する衝突から説明しなくてはならない。

[C①] 1つの社会構成体は、すべての生産諸力がそのなかではもう発展の余地がないほどに発達しきらぬいうちは、けっして没落することなく、また、新しいさらに高度の生産関係は、その物質的な諸条件が古い社会の胎内で孵化しきらぬいうちは、けっして古いものに取って代わることはない。

[C②] それだから、人間はつねに、みずからが解決できる課題だけをみずからに提起する。というのは、やや立ち入ってみるとつねにわかることだが、課題そのものが生まれるのは、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、または少なくともそれらが生じつつあることが把握される場合だけである。

[D①] 大づかみに言って、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生産様式が、経済的社会構成体の進歩していく諸時期として特徴づけられよう。ブルジョア的生産関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的、というのは、個人的敵対という意味ではなく、諸個人の社会的生活条件から生じてくる敵対という意味である。

[D②] しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対を解決するための物質的諸条件をもつくりだす。それゆえ、この社会構成体をもって人類社会の前史は終わりを告げる。」

《マルクス「『経済学批判』への序言」(1859年)、『『経済学批判』への序言・除雪』<科学的社会主义のための古典選書>、新日本出版社、2001年、p 14~16》

< 資料 ③ > マルクス「ゴータ綱領批判」1875年

「[A①] 三、「労働を解放するためには、労働手段を社会の共有財産に高めること、また労働収益を公正に分配しつつ総労働を協同組合的に規制することが必要である。……（中略）……「労働の全収益」という文句が消え失せたように、いまや全体として「労働収益」という文句も消え失せる。

[A②] 生産手段の共有を土台とする協同組合的社會の内部では、生産者はその生産物を交換しない。

[A③] 同様にここでは、生産物に支出された労働がこの生産物の価値として、すなわち生産物にそなわった物的属性として現われることもない。

[A④] なぜなら、いまでは資本主義社會とは違って、個々の労働はもはや間接的にではなく直接に総労働の構成部分として存在しているからである。

[A⑤] 「労働収益」という言葉は、今日でも意味があいまいだからしりぞけるべきものだが、こうしてまったくその意味を失ってしまう。

[B①] ここで問題にしているのは、それ自身の土台の上に発展した共産主義社會ではなくて、反対にいまはようやく資本主義社會から生まれたばかりの共産主義社會である。したがって、この共産主義社會は、あらゆる点で、經濟的にも道徳的にも精神的にも、その共産主義社會が生まれてきたばかりの母胎たる旧社會の母斑をまだ帯びている。

[B②] したがって、個々の生産者は、彼が社會にあたえたのと正確に同じだけのものを一控除をしたうえで一返してもらう。個々の生産者が社會に与えたものは、彼の個人的労働量である。……（中略）……だから、ここでは、平等な権利は、まだやはり一原則上一ブルジョア的権利である。もっとも、もう原則と實際が衝突することはない。ところが、商品交換のもとでの等価物の交換は、たんに平均として存在するだけで、個々の場合には存在しないのである。こんな進歩があるにもかかわらず、この平等な権利はまだつねにブルジョア的な制限につきまとわれている。……（中略）……すべてこういう欠陥を避けるためには、権利は平等であるよりも、むしろ不平等でなくてはならないだろう。

[C①] しかし、こうした欠陥は、長い生みの苦しみのち資本主義社會から生まれたばかりの共産主義社會の第1段階では避けられない。権利は、社會の經濟構造およびそれによって制約される文化の發展より高度であることは決してできない。

[C②] 共産主義社會のより高度な段階で、すなわち諸個人が分業に奴隸的に従属することが無くなり、それとともに精神労働と肉体労働の対立が無くなつたのち、労働がたんに生活のための手段であるだけでなく、労働そのものが第一の生命欲求となつたのち、諸個人の全面的な發展にともなつて、彼らの生産力も増大し、協同的富のあらゆる泉がいっそう豊かに湧き出るようになったのち一その時、初めてブルジョア的権利の狭い範囲を完全に踏み越えることができ、社會はその旗の上にこう書くことができる。

[C③] 一人一人はその能力に応じて、各人にその必要に応じて！

[D①] 私が、一方では「労働の全収益」に、他方では「平等な権利」と「公正な分配」とにやや詳しく立ちいったのは、一方では、ある時期には多少の意味を持っていたが今ではもう時代遅れの駄弁になっている觀念を、わが党に再び教条として押し付けようというすることが、また、他方では、非常な努力でわが党に植えつけられ、今では党内に根をおろしている現実主義的見解を、民主主義者やフランス社会主義者お得意の、権利やら何やらに関する觀念的なおしゃべりで再び歪曲することが、どんなにひどい罪悪を犯すことであるかを示すためである。

[D②] 以上に述べたことを別にしても、いわゆる分配のことで大騒ぎしてそれに主要な力点を置いたのは全体として誤りであった。

[D③] いつの時代にも消費手段の分配は、生産諸条件そのものの分配の結果に過ぎない。しかし、生産諸条件の分配は、生産様式そのものの1特徴である。

[D④] たとえば資本主義的生産様式は、物的生産諸条件が資本所有と土地所有というかたちで働く者のあいだに分配されていて、これに対して大衆は單に人的生産条件すなわち労働力の所有者に過ぎない、ということを土台にしている。生産の諸要素がこのように分配されていれば、今日のような消費手段の分配がおのずから生じる。

[D⑤] 物的生産諸条件が労働者自身の協同的所有であるなら、同じように、今日とは違った消費手段の分配が生じる。

[D⑥] 俗流社会主義はブルジョア経済学者から（そして民主主義者の一部がついで俗流社会主義者から）分配を生産様式から独立したものとして考察して、また扱い、したがって社会主義を中心とするものであるかのように説明するやり方を、受け継いでいる。

[D⑦] 「眞実の関係が明らかにされているのに、なぜ逆戻りするのか？」（p22～29）

（以上で（三）終了）

「[E①] 次に問題になるのは、國家制度は共産主義社會において、どんなふうに変わるか？ということである。言い換えれば、そこでは今日の國家機能に似たどんな社会的機能が残るのか？ということである。この問題にはただ科学的に答えることができるだけであって、人民という言葉と國家という言葉を千度も組み合わせたところで、ノミの1跳ねほども問題には近づきはしないのである。

[E②] 資本主義社會と共産主義社會とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照應してまた政治上の過渡期がある。この時域の国家はプロレタリアートの革命的執権以外の何物でもあり得ない。」（p39～40）

《マルクスニエンゲルス『ゴータ綱領批判・エルフルト綱領批判』大月書店＜国民文庫＞よりマルクス「ゴータ綱領批判」》

< 資料 ④ > マルクス『資本論 第3巻』「第48章 三位一体的定式」

「[A] ……（前略）……したがって、社会の現実的富と、社会の再生産過程の恒常的な拡大の可能性とは、剩余労働の長さに依存するのではなく、剩余労働の生産性および剩余労働が行なわれる生産諸条件の多産性の大小に依存する。」

[B①] 自由の王国は、事実、窮屈と外的な目的への適合性によって規定される労働が存在しなくなるところで、はじめて始まる。したがってそれは、当然に物質的生産の領域の彼岸にある。

[C①] 野蛮人が、自分の諸要求を満たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないよう、文明人もそうしなければならず、しかも、すべての社会形態において、ありうべきすべての生産様式のもとで、彼は、そうした格闘をしなければならない。

[C②] しかし同時に、この諸欲求を満たす生産力も拡大する。

[C③] この領域における自由は、ただ、社会化された人間、連合した生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝によって、一 盲目的な支配力としてのそれによって、二 支配されるのではなく、この自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくこと、すなわち最小の力の支出で、みずからの人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件のもとでこの物質代謝を行なうこと、この点にだけありうる。

[C④] しかしそれでも、これはまだ必然性の王国である。

[B②] この王国の彼岸において、それ自体が目的であるとされる人間の力の発達が、真の自由の王国が、一 といつても、それはただ、自己の基礎としての右の必然性の王国の上にのみ開花しうるのであるが、二 始まる。

[B③] 労働日の短縮が根本条件である。」

« 新日本新書版『13巻』p1434~5、原書p828»

< 資料 ⑤ > マルクス『フランスにおける内乱』1871年

「労働者階級は……（中略）……自分自身の解放をなしとげ、それとともに、現在の社会がそれ自身の経済的作用によって不可抗的に目指している、あのより高度な形態を創り出すためには、長期の闘争を経過し、環境と人間とを作り替える一連の歴史的過程を経過しなければならないことを知っている。」

« 『マルクス・エンゲルス全集第17巻』p320 »

< 資料 ⑥ > マルクス『フランスにおける内乱』第1草稿

「コミュニケーションの組織がいったん全国的な規模で確立されたとき、おそらくその前途に待っている災厄は、奴隸所有者の散発的な反乱であろう。それらの反乱は平和な進歩の仕事をしばらく中断させはするが、社会革命の手に剣を握らせることによって、かえて運動を促進するだけであろう。」

労働者階級は、彼らが階級闘争のさまざまな局面を経験しなければならないことを知っている。

[A①] 労働の奴隸制の経済的諸条件を、自由な連合的労働の諸条件と置き換えることは、時間を要する漸進的な仕事しかあり得ないこと（その経済的改造）。

[A②] そのためには、分配の変更だけではなく、生産の新しい組織が必要であること、言い換えれば、現在の組織された労働という形での生産の社会的形態（現在の工業によって作り出された）を、奴隸制のかせから、その現在の階級的性格から救い出す（解放する）ことが必要であり、その調和の取れた国内的および国際的な調整（コーディネイション）が必要であることを、彼らは知っている。

[A③] この刷新の仕事が、既得権益と階級的利己心の諸抵抗によって再三再四押しとどめられ、阻止されるであろうことを、彼らは知っている。

[A④] 現在の『資本と土地所有の自然諸法則の自然発生的な作用』は、新しい諸条件が発生していく長い過程を通じてのみ、『自由な連合的労働の社会経済の諸法則の自然発生的な作用』によって置き換わりうること、それは、『奴隸制の経済諸法則の自然発生的な作用』や『農奴制の経済諸法則の自然発生的な作用』が交替した場合と同様であることを、彼らは知っている。

[A⑤] しかし同時に彼らは、政治的組織のコミュニケーション的形態を通じて巨大な進歩を一挙に獲得できること、そして、彼ら自身と人類のためにその運動を開始すべき時が来ていることを、知っている。」

« 『マルクス・エンゲルス全集第17巻』p517~518 »

が、いちばん新しいものが、日本共産党中央委員会の社会科学研究所の監修のもとで、ひじょうにたくさんの研究者が協力して翻訳した、この新日本出版社発行の新書サイズ『資本論』です。

この新訳『資本論』は、新書版で全體で十三冊ですが、この十三冊のなかに『資本論』第一巻、第一巻、第三巻の三つの巻がすべて収められています。なおこのほかに、『資本論』の第四巻として『剩余価値学説史』という経済学の歴史をまとめたものがありますが、理論の体系としては二巻までが『資本論』の全體です。

この全三巻の『資本論』の骨組みは、まず第一巻が第一篇の「商品と貨幣」から始まり、第七篇まで七つの篇、章でいえば、一十五章から構成されています。
第一巻は三篇、一一一章。第三巻は七篇、五十一章。合計すると、『資本論』は全體で十七篇、九十八章から成っています。(資料1参照)。

つぎに、ページ数でみると、第一巻が一千三百十五ページ、第二巻が八百四十六ページ、第三巻が一千五百七十九ページ、三巻全體の合計では三千七百四十ペ

ージになります。

りのやうに三千七百四十ページというと、だしあな

資料1 「資本論」の篇別構成とページ数

卷	篇の表題	章	ページ数
新日本出版社 新書版	第1巻の6つの序文		50
① 第1篇 商品と貨幣	3	190	
② 第2篇 貨幣の資本への転化	1	54	
③ 第3篇 絶対的剩余価値の生産	5	241	
④ 第4篇 相対的剩余価値の生産	4	326	
⑤ 第5篇 絶対的および相対的剩余価値の生産	3	43	
⑥ 第6篇 労資	4	52	
⑦ 第7篇 資本の蓄積過程	5(3) *第8篇 いわゆる本源的蓄積	254 105	
⑧	小計	25	1,315
第II巻の序言		38	
⑨ 第1篇 資本の蓄積とそれらの衝突	6	194	
⑩ 第2篇 資本の回転	11	316	
⑪ 第3篇 社会的資本の流通と再生産	4	298	
第II巻 小計	21	846	
第III巻の序言		37	
⑫ 第1篇 剩余価値の利潤への転化	7	201	
⑬ 第2篇 利潤の平均利潤への転化	5	114	
⑭ 第3篇 利潤率の傾向的下落の法則	3	94	
⑮ 第4篇 商品取引資本・貸借取引資本(商人資本)	5	115	
⑯ 第5篇 利子生み資本(借用)	16	506	
⑰ 第6篇 超過利潤の時代への転化	11	346	
⑱ 第7篇 購入とその諸源泉	5	128	
(第III巻への補遺) (エンゲルス)	38		
第III巻 小計	52	1,579	
総計 17篇 (*18篇)	98	3,740	

*ランク版では、「本源的蓄積」が第8篇に格上げされている

目次

- 一、科学的社会主义と『資本論』
- 二、『資本論』はどのようにして書かれたか
- 三、資本主義とはどういう時代か
- 四、「資本主義の経済法則」と日本経済
 - 『資本論』の理論について、六つの角度から考えてみる
 - (1)「市場経済」と「資本主義」の関係
 - (2)資本主義のもとでの搾取(剩余価値の生産)の特徴
 - (3)貧困原因の一極化をすすめる資本蓄積の法則
 - (4)地球環境問題と「人間と自然の物質代謝」の法則
 - ◇以上今号
 - (5)バブル経済、カジノ経済に象れた資本主義の劣生性、腐朽性
 - ◇以下次号
 - (6)資本主義から社会主義への移行の法則と労働者階級の使命

五、現代の資本主義と『資本論』

むすび——われわれは「現代に『資本論』をどう生きかすか」を問われている

膨大なものです。しかし、考え方によつては、たとえば一日に十ページずつ読むと、第三巻まで含めても三百七十四日、つまり三百六十五日プラス九日、ほぼ一年で全三巻に目を通すことができる。とにかく初めて読むときは、まず第一巻をしっかりと読むことが大事ですが、その第一巻は約一千三百ページですから、毎日十ページずつ読むと百二十日、四ヵ月ちょっとで、ともかく第一巻全体に目を通すことができます。

もちろん『資本論』の内容を深く理解しながら読むためには、ページを繰るだけではだめです。『資本論』は、推理小説や恋愛小説のように一気に読んでスラスラわかるといふようなものではありません。『資本論』を読むためには、相當たいへんな努力と根気、ねばりが必要です。しかし、本気で取り組めば必ず

的には、最先端の論争など頭におきながら書かれていた。そういうところが面白いのです。

それからもう一つ、不破をよく本校のやり方に聞いて感じるのは、広く文献を読んだ上で、最後は徹底的に自分の頭で考えるところです。いろいろな人の研究を調べていくけれども、それを紹介するのが目的ではない。自分の頭で深く考えて、論点を整理・分析して、新しい発見をする。この「自分の頭で徹底的に考える」というのが、先ほど述べたように、科学的社会主义の根本的な方法でもあるといえます。

さて、不破委員長の本は、上の一冊で、九百ページにわたる膨大なものですから、以下でその内容を一言で、「紹介する」ことはできません。そこで私は、「マルクスとエンゲルスは『資本論』をどのように執筆し、編集・出版したか」というのを、資料2のような簡単な一覧表にまとめさせてみました。

この表の見方を簡単に説明しますと、真ん中に引かれた横の線がマルクスとエンゲルスの生涯を示す線です。マルクスは、一八一八年五月五日に生まれて、八

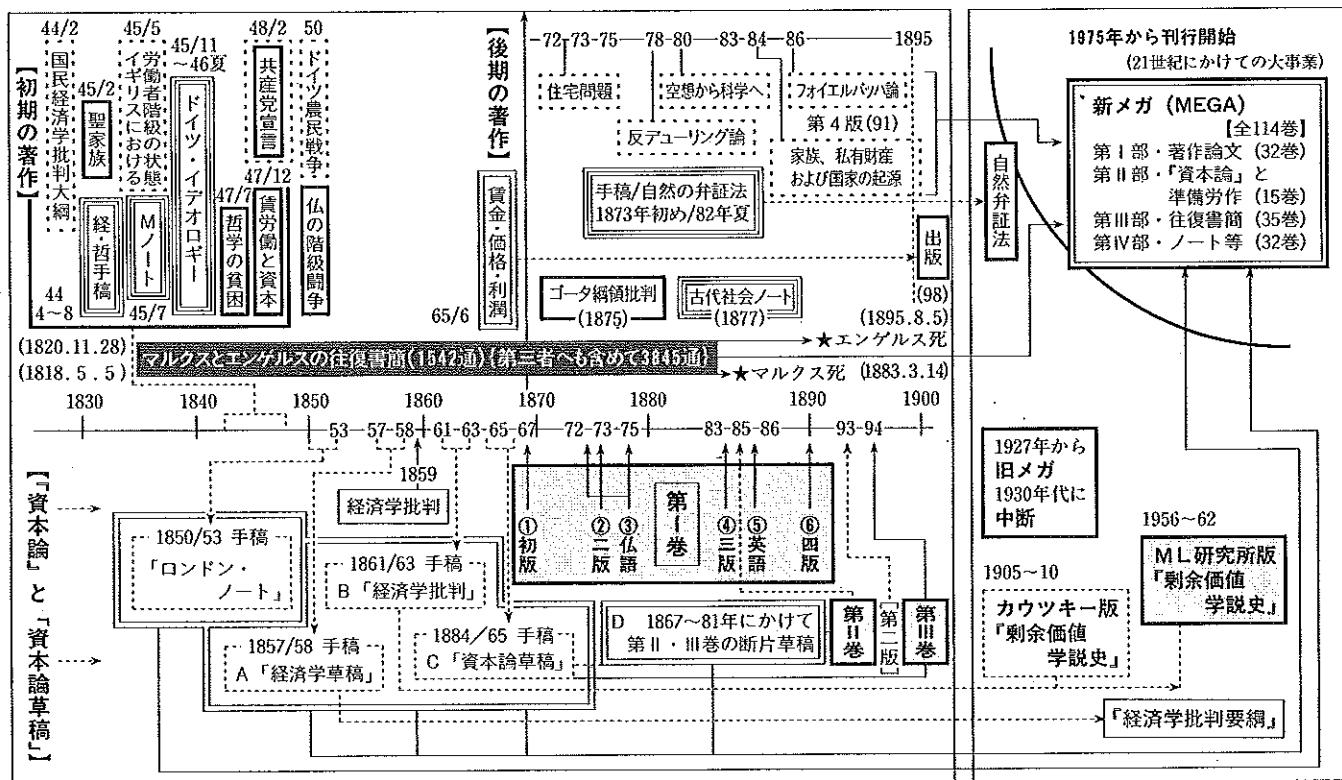
三年の三月十四日にはじめて亡くなります。エンゲルスは一八一〇年十一月二十八日に生まれて、九五年八月五日に亡くなっています。上の段は、左から『資本論』以外のマルクス・エンゲルスの重要な著作などをあげてあります。下の段は、『資本論』の出版の経過、『資本論』とその準備のためのマルクスの草稿類、一般に「資本論草稿」と呼ばれていますが、それらの書かれた経過をまとめてあります。

この表をしながら、いくつか大事な点をあげてみます。

(2) マルクスとエンゲルスの生涯をかけた大事業であつたこと

第一に、マルクスもエンゲルスも、いかに『資本論』の完成のために力をそいだかということです。この表で、マルクスの著作を年代を追って見ていくと、一八四〇年代の後半に上の段の左にいろいろな著作があります。以下に書き切れない重要な論文、著作もいろいろあります。一八四八年の「共産党宣言」、五〇年の「フランスの階級闘争」あたりから、下の段

資料2 マルクスとエンゲルスは『資本論』をどのように執筆し、編集・出版したか



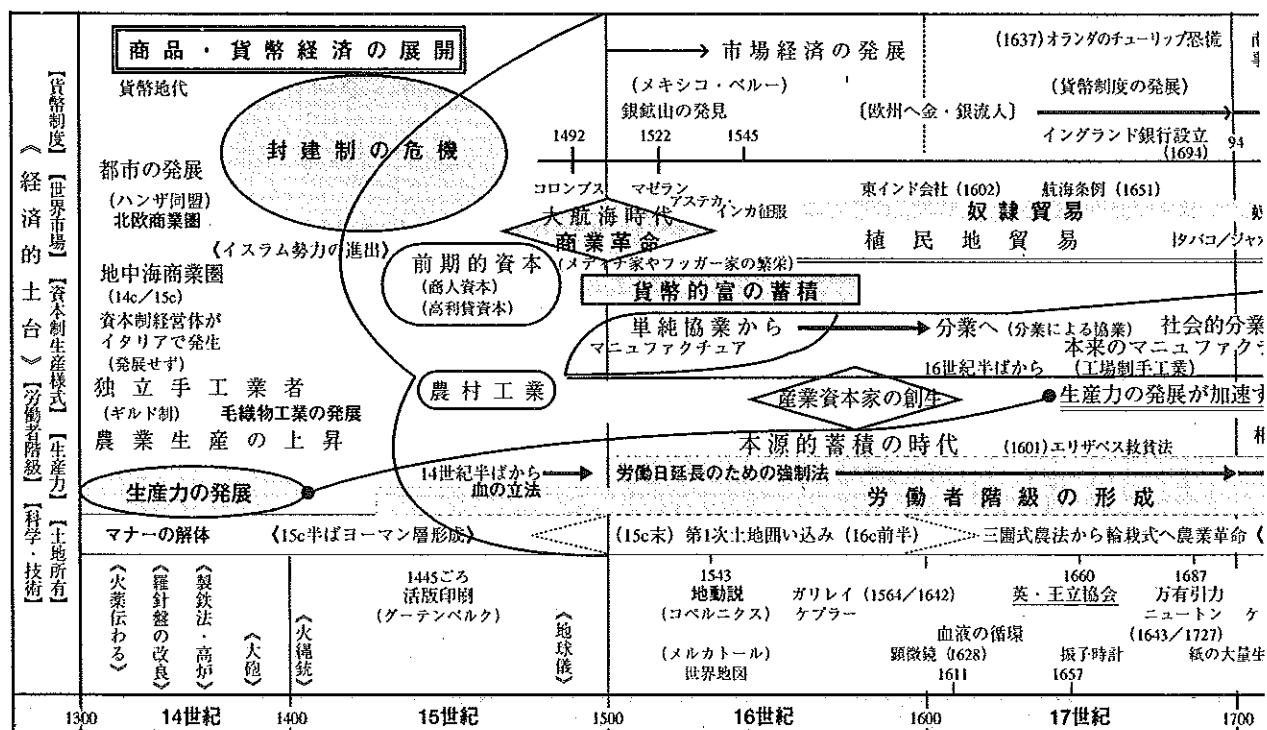
(注) □は、出版された「資本論」。『資本論』第I巻の①～⑥は、マルクス、エンゲルスの関係した6つの版の序文、後書きなど（独語第1版～第4版、仏語版、英語版）。□は、ノート、「資本論草稿」など。（それをもとに、エンゲルスが『資本論』第II巻、第III巻を編集・出版。のちに、第IV部「剩余価値学説史」、「経済学批判要綱」も出版された）。「新メガ」=新しいマルクス・エンゲルス全集（MEGA=Marx/Engels Gesamtausgabe）

【年表】世界の資本主義の生成と発展

西ヨーロッパを中心とした世界資本主義発達史の概略

一封建制からの移行期

封建制からの移行期							
	1300	14世紀	1400	15世紀	1500	16世紀	1600
スポーツ	騎馬競技(トーナメント) 騎士道精神 (テニスの原型)	ルネサンス (フットボールの原型)	→人間身体への関心			英國で貴族のスポーツ盛行 (ゴルフ/ホッケー/クリケットなどの原型)→民衆のゲームとして発展	→英國(競り合)→英(競り合)
音楽	グレゴリオ聖歌 吟遊詩人		(世俗音楽)		(シャンソンなど大衆歌謡)	オペラ バロック音楽 ストラディバリ(1644/1737)	バッハ
美術	【ゴシック建築】	ルネサンス(14世紀~16世紀)	レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452/1519)	デューラー ラファエロ ミケランジェロ	エル・グレコ ブリューゲル	バロック式 ルーベンス	ペラスクス レンブラント
文学	ダンテ(1265/1321) 神曲 ペトラル		エラスムス	モンテニュ(1533/1592) セルバンティス	【古典主義】モリエール(1622/1673) ラシース シェイクスピア(1564/1616)	スウィフト ミルトン	正
哲学	中世スコラ哲学 (トマス・アクィナス/13世紀) (ロジャー・ベーコン)			【大陸合理論】デカルト(1596/1650) 【イギリス経験論】 フランシス・ペークン(1561/1626)	バスカル スピノザ/ライブニッツ/モンtesキュー ロック	啓蒙(啓蒙)	ル(直)
経済学			マキャベリ 君主論	1516 ユートピア(モア)	【重金主義】 【王室重商主義】	1662 ロビンソン・クーロー(ホップズ) リヴァイアサン 租税貢収論(ペティ) 重商主義の経済学	【議会重商主(直)】
国家覇権戦争	オスマン・トルコ 建国 【オスマン・トルコの地中海進出】 【地中海の繁栄】 【イタリアの繁栄】	教皇権の衰退 【地中海の繁栄】	1453 ビザンツ帝国滅亡	英テューダー王朝 スペイン王国 【ボルトガル・スペインの繁栄】	絶対主義の国家 エリザベス1世 王権の伸張 イタリア戦争	【フランスの繁栄】ルイ14世 【オランダの繁栄】 英國がスペインの無敵艦隊撃破 三十年戦争 英蘭戦争	本来の重商主義の国 【第二次英仏戦争】 スペイン継承戦争
革命階級闘争	チヨンビの乱 《ベストの流行》	ワット・タイラーの反撃		ルター 1525 ドイツ農民戦争	1566 オランダ革命 トマス・ミンツァー カルヴァン(1541)	1642 英ピューリタン革命 (平等派)	1688 英名革命 近代プロレタリアートの先駆者 〔同盟から、しだいに対立〕
	王十封建領主十特權僧侶と農奴十都市市民の闘争		宗教改革			王十封建貴族と新興資本家階級	〔同盟から、しだいに対立〕



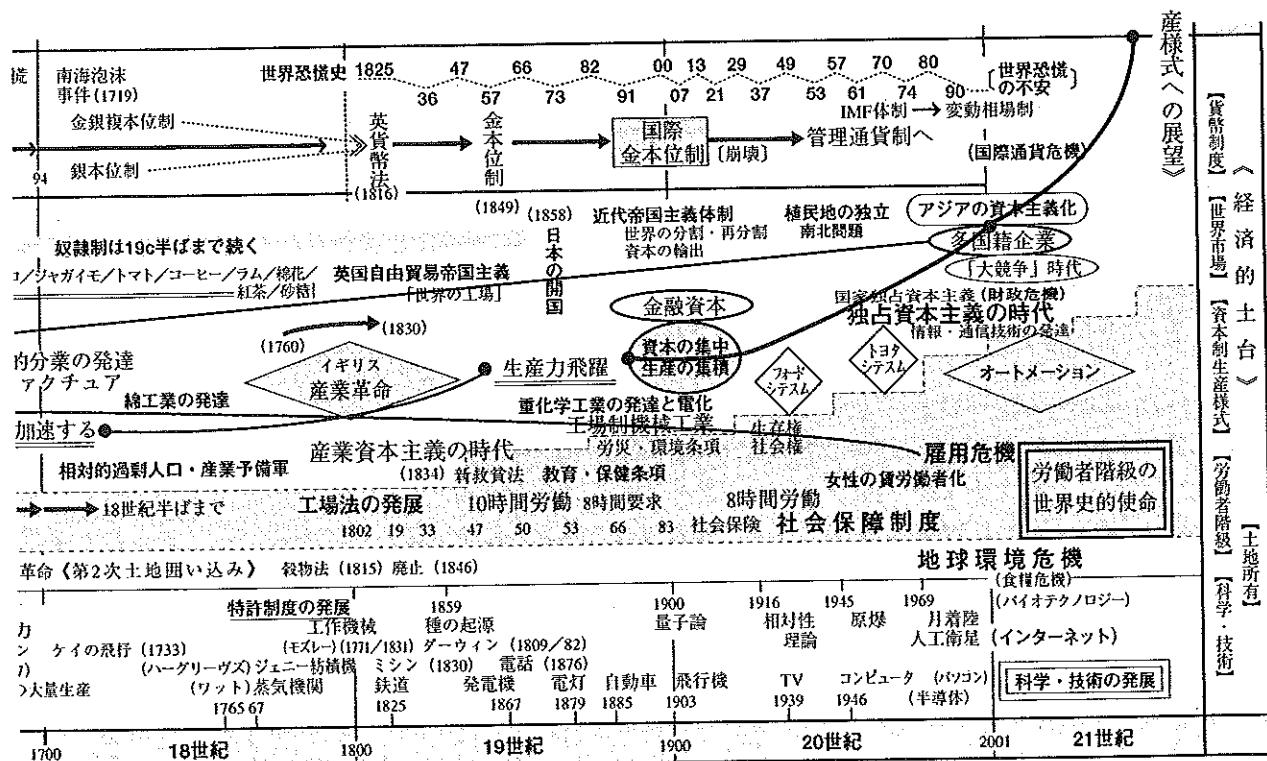
この年表は友寄英隆氏の作成になるものです。52³、53³の表とあわせ計4枚で1つの年表（上段が上部構造、下段が経済的土台）になります。コピーし、はりあわせるなどしてご利用ください。

〔年表〕世界の資本主義の生成と発展

西ヨーロッパを中心とした世界資本主義発達史の概略

(1997.8.1作成) 友寄英隆

1700	18世紀	1800	19世紀	1900	20世紀	2001	21世紀
・ 英国で近代スポーツ誕生→クラブ／パブリック・スクール→労働者へ 〔競馬から徒歩競争／サッカー／ラグビー／テニスなど〕			1896 オリンピック 国際化 大衆スポーツ 米国で、バスケット(1891) バレー(95) Wカップ(1930) 商業主義 ダービー(1780) ドイツ 体操、スウェーデン体操 野球(1845) プロ野球(1871)		(1896) オリンピック 国際化 大衆スポーツ 【戦争とスポーツ】 【アマとプロ】	生涯スポーツ	スポーツ
古典派 モーツアルト	ペート・ベン(1770／1827)	ロマン派 シューベルト／ショパン	国民楽派 フォスター	印象派 ドビュッシー	12音階 ガーシュイン	電子音楽 ストラビンスキイ	音楽
ロココ式 古典主義	自然主義 ミレー(1814／1875) 写実主義 印象派	ゴッホ ロダン			立體派 ピカソ(1881／1973) 野獸派／超現実派 グリ	人間の文化の継承と発展	新たな世界史的変革の時代
ト 古典主義 ハイネ ゲーテ(1749／1832)	ロマン主義 写実主義／自然主義／象徴主義(ボードレール) バルザック	トルグeman／トルストイ モーパッサン	ゴーリキー(1868／1936)	ヘミングウェイ ロマン・ロラン	ショーロホフ	美術 文学	哲學
啓蒙思想 佛唯物論 ルソー(1712／1778) 百科全書 ディドロ／ヴォルテール	独観念論 カント(1724／1804)	ヘーゲル(1770／1831) フョイエルバハ(1804／1812)	ニーチェ フロイト	実存主義 ハイデッガー	プラグマティズム サルトル	経済学の創造的発展の課題	経済学
重商主義	古典派経済学 経済表(ケネー)(スミス)	資本論(マルクス) ①1867②1885③1894 (リカード)経済学原理 1818	レーニン 1917 1936 1870年代 1848(ミル)	帝国主義論 シュンペーター 一般理論 限界革命(新古典派)	第一回世界大戦 (ケインズ)	自由・平等・民主主義	国家 獄権 戦争
豪の国家(初期ブルジョア国家) リスの繁栄】 英仏百年戦争 7年戦争	自由競争の国家 ヴィクトリア女王(1837／1901) アヘン戦争	独占の国家(「福利国家」) 新たな国民国家の形成 【パクス・ブリタニカ】 独仏戦争	国連 【パクス・アメリカーナ】 第一次大戦 ベトナム戦争 中東戦争	第三次世界大戦 朝鮮戦争(冷戦体制) ベトナム戦争 湾岸戦争	核戦争の不安	核廃絶と世界平和	核廃絶と世界平和
承戦争 オーストリア継承戦争 ナポレオン(1769／1821)	仏革命戦争 (1861／65)	南北戦争 日清戦争 日露戦争 第二次大戦 中東戦争	1848 1868 1871 明治維新 パリコンミューーン ロシア革命 中国革命	1917 ソ連崩壊	ソ連崩壊	革命 階級闘争	革命 階級闘争
り先駆者的下層民 に対立へ)	1776 アメリカ独立革命 1789 フランス大革命 空想的 社会主義 オウエン サンシモン フーリエ	2月革命 明治維新 1836／48 (ラグド運動)	1864／76 (チャーチスト)(第1インター)	1887／1914 (第2インター)	1917／1943 (コミニティン)	多数者革命 先进国革命	新たな生産様式



と説明しました。

その上で、講義にあたつたのですが、そういう目で『資本論』を読みながらしてみると、未来社会論を展開した部分が予想以上に多く、大きな出陣をしており、私自身があらためてそのことに驚かされたほどでした。

そこで、この話の入口として、みなさんに、まず、マルクスが『資本論』のなかで与えた未来社会の特徴づけの一覧を見てもらいたいと思います。

私たちの場合には、ある概念について、一定の規定づけ、特徴づけをすると、それを決まり文句にしてしまい、その概念に触れるときには、同じ特徴づけを何回も繰り返す、ということになりますが、ちنانのですが、その点では、マルクスは、たいへん自由闊達^{カクサツ}なのです。『資本論』全三部のなかで、未来社会について繰り返し語りますが、同じ表現ですますという場合は、ほとんどありません。実に多面的に、いろいろな角度から、さまざまな表現を使って、そこでの話にあらう形での未来社会の規定づけを工夫しています。それぞれの規定づけは、未来社会のいろいろな側面についての考察のなかでのものですから、意味を詳しく読み取るには、その議論の中身を知ることが必要になりますが、ここでは、そこまで踏み込むことはしません。マルクスによる未来社会の特徴づけの一覧として見ていただきたいと思います。

『資本論』のなかの未来社会の特徴づけ

1. 「共同的生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体」(第一部・第一編「第一章 商品」①一二三二ページ、〔I〕92ページ)。
2. 「社会的生活過程の、すなわち物質的生産過程の姿態は、……自由に社会化された人間の產物として彼らの意識的計画的管理のもとにおかれれる」(同前、①一二三五ページ、〔I〕94ページ)。
3. 「社会的生産過程の……意識的な社会的管理および規制」(第一部・第四編「第一二章 分業とマニユアクチュア」③六一八ページ、〔I〕377ページ)。
4. 「共産主義社会」(第一部・第四編「第一三章 機械と大工業」③六八一ページ、〔I〕416ページ)。
5. 「各個人の完全で自由な発展を基本原理とする、より高度な社会形態」(第一部・第七編「第二二章 剰余価値の資本への転化」④一〇一六ページ、〔I〕618ページ)。
6. 「現在の生産手段および労働力によって直接的かつ計画的に実現されうるいづそつ合理的な結合」(同前、④一〇四七ページ、〔I〕636ページ)。

7. 「この否定（資本主義的私的所有の否定——不破）は、……資本主義時代の成果——すなはち、協業と、土地の共同占有ならびに労働そのものによって生産された生産手段の共同占有——を基礎とする個人的所有を再建する」（第一部・第七編「第二四章 いわゆる本源的蓄積」④一二〇六ページ、〔I〕791ページ）。
8. 「共同的生産」（第一部・第一編「第六章 流通費」⑤一一一ページ、〔II〕137ページ）。
9. 「共産主義社会」（第二部・第二編「第六章 可変資本の回転」⑨四九七ページ、〔II〕316ページ）。
10. 「社会的（社会化された）生産」（第二部・第三編「第八章 緒論」⑦五六六ページ、〔II〕358ページ）。
11. 「労働者たちが自分自身の勘定で労働する社会状態」（第三部・第一編「第五章 不變資本の使用における節約」⑧一四二ページ、〔II〕93ページ）。
12. 「人間社会の意識的な再構成」（同前、⑧一五〇ページ、〔II〕99ページ）。
13. 「生産が社会のまごころでの現実の管理のもとにある」社会（第三部・第二編「第一〇章 競争による一般的利潤率の均等化。……」⑨三一一ページ、〔II〕197ページ）。
14. 「生産者たちが自分たちの生産をまごころで作成した計画に従って規制する社会」（第三部・第三編「第一五章 ハの逆則の内的諸矛盾の展開」⑨四五五ページ、〔II〕271ページ）。
15. 「資本（生産手段——不破）が生産者たちの所有に、ただし、もはや個々ばらばらな生産

者たちの私的所有としての所有ではなく、結合した生産者である彼らの所有としての、直接的な社会的所有としての所有に」転化する。これとともに、「これまでまだ資本所有と結びついていた再生産過程上のすべての機能が、結合した生産者たちの単なる諸機能に、社会的諸機能に、転化する」（第三部・第五編「第二七章 資本主義的生産における信用の役割」⑩七五八ページ、〔II〕453ページ）。

16. 「結合的生産様式」（同前、⑩七六四ページ、〔II〕453ページ）。
17. 「結合した労働の生産様式」（第三部・第五編「第三六章 資本主義以前の状態」⑪一〇六四ページ、〔II〕621ページ）。
18. 「社会の資本主義的形態が上揚されて、社会が意識的かつ計画的な結合体（アソシィアツィオーン）として組織される」（第三部・第六編「第三九章 差額地代」⑫一一六一页、〔II〕673ページ）。
19. 「より高度の経済的社會構成体」（第三部・第六編「第四六章 建築地代。……」⑫一三五二一页、〔II〕784ページ）。
20. 「社会化された人間、結合した生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝」を「合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおく」社会（第三部・第七編「第四八章 三位一体的定式」⑫一四三五ページ、〔II〕828ページ）。